
文化、政治、経済が交錯する中での中国現代化

葉 啓 政

〈国立台湾大学〉

摘 要

世界的な文明史の流れからすると、19世紀の満州人の王朝であった清朝期の中国と同じように、現在の中国が推進しているいわゆる「現代化」も、基本的には18世紀以来の西洋の啓蒙主義的な理性文明に対する反応であると言える。その反応も、かつて西側世界で起こったような種々の現象ばかりでなく、それにより提起された問題意識も同時に担うことになった。当然のことながら、中国人の反応は「中国的」なものであり、それは既存の伝統文化モデルと形式的な理念に支えられながら進んでいて、中国社会の既存の構造に深く影響されている。お決まりの文句で表現するならば、「西餐中吃」（西洋料理を中国式に食べる）ような状況で、このような状況下では、二つの文化が担ってきた基本的な筋道が異なるため、自ずと互いに相容れない状況が生じてくることも免れざるを得ない。このように、いつのまにか特殊な問題が加わり、人々の間でも異なる期待が生じるようになった。

もし、基本的人権を肯定する自由民主の法治体制を実現していることが「近代化」の意味（あるいは期待）する永遠普遍の基本的な歴史の流れであるのなら、自由競争を強調し、私有財産権の正当性を保証する資本主義を主導的な経済体制と見なすことになるが、これはただ一連の特殊な歴史条件下で生じてきた現象に過ぎない。これは、歴史の発展から見るならば、「近代化」への幕を開くと同時に、「近代化」が欲する弁証否定（さらにはその終結）という歴史段階での現象である。

この立場に準ずるならば、中国政府当局が経済面での「改革開放」を推進することをもって「近代化」を確立する基軸にしたとき、基本的には、啓蒙期以来、西側世界の特定の歴史哲学を基調とする弁証実践の過程で発生したものに続いて来たものであった。1949年、中国共産党は社会主義の旗印を掲げながらマルクスの予言を遂行し、当時の中国に存在していた脆弱で、未熟な資本主義は一挙に粉碎されてしまった。マルクスの理論により、旧ソ連と同じように中国共産党は、資本主義の発達した、日に日に「成熟」に向かう西欧社会でまだ未達成の歴史の発展段階を成し遂げることになった。たとえそれが早熟にして繰り上げられて歴史的な弁証過程を全うしたのであったにしても。今日のような「改革開放」はほとんど歴史的な弁証過程全体が転倒したようなもので、たとえそれが何ら資本主義の奥底にある強靱さを認めることと同義ではないとはいえ、少なくとも、資本主義の真

の「成熟」期を過ぎた後に社会主義が到来するという必然性の証明を望むことを意味し、あるいはさらに進んで、マルクスの歴史唯物弁証論の真実性を根本的に否認し、資本主義というこの「古い」体勢に近づいて、歴史をここで終わらせようとするのである。明らかなのは、中国が西側の「近代化」をもって社会を構築しようとしたとき、このような、歴史的に制度に従属するという特質を備えた経済の向かう迂回・転倒の発展経路を選択するが、そうではなく、これまで「近代化」概念が必然的に意味した自由民主政治の政治体制をもって起点とするのでもない場合、これは特別に注意を要する理論的な課題となる。

簡単に言うと、中国が1970年代の末期に経済面を「近代化」の起点にしようとし、さらにそれがすべてに及ぼうというのは、臨機応変に対応しつつ、漸次形成されてきたグローバル化の趨勢によりもたらされたと言えるであろう。一方、世界全体で資本主義化された生産様式が体系化されて構造的な圧力（特に経済面で現れた）となり、中国はそれに直面せざるを得なくなった。これは、「社会主義ないしは弁証法的に資本主義を否定する歴史形式」という言い方が厳しい挑戦を受けているだけでなく、中国共産党政権が頼りにして証明してきた正当性を動揺させることになった。さらに注意すべきは、一貫して政治権力に仮託することによって、上から下までの変遷が起こる場合、いかにして既存の体制と借り入れた体制の呈する二つの異質な初期条件が全く異なる運営原理の間で適切な均衡点を探せるかが、将来、必然的に厳しい試練に立ち向かわねばならない根本的な課題となるであろう。さらに、権威主義的な体制下で、経済的な「改革開放」は政治力を通して推進され、このように政治力でもって経済力を凌駕する「近代化」は、基本的には、西側世界の資産階級が下から上まで「近代化」されることによって、政治力と経済力が分離して対抗するようになった歴史とは異なるものである。西側の近代化が資産階級の「平等自由」のスローガンに仮託して既存の主導勢力に対して「公平正義」を勝ち取ったことに比べ、現段階の中国の近代化は基本的には政治勢力と経済勢力の大結合から始まっており、あるいはさらに適切な言い方をすれば、政治が経済に浸透し、経済をその運営原理の中に取り込んだのである。言わば、これは中国の伝統的な封建専制体制が社会主義の名をまもって生み出してきた運営原理の一種の総合的な現れである。

しかし、資本主義の歴史的な性格の中に宿る古典自由主義的な思想は、強制的な性格を伴った構造原理をなしており、これは必ず将来の中国社会を政治民主化の問題に直面させ、公平正義を貫徹するのに必ず考慮しなければならない基礎となる。このような差し迫った過程の中で、まず直面するであろう課題は、経済力はどのようにして政治力の中から漸次開放され、独立した社会力を形成するかである。予想されるのは、この中間で、知識分子と中小企業主を主にして形成されるいわゆる中産階級であり、かなり重要な歴史的役割を演ずることになる。これに基づき、かつ全体的な歴史背景から見れば、現在、中国の学術界で生み出される新自由主義と新左翼思想などの論述も、自ずと理解される。

もし、新自由主義と新左翼思想を中国の学術界が中国の未来のために取り上げたものと見なすならば、新自由主義は改革・変遷の方向で期待される立場から切り込み、西側資本

主義社会の主導的な運行メカニズムを延長しつつ、代表的なのはある種の理想を映し出すとする主張であり、新左翼思想は既存の社会体制という基礎に反省を試みるが、取り出されたものは20世紀初期西欧資本主義社会左翼思想家の基本的な思考枠組みであり、現実を修正しようとする主張（修正主義的な主張？）が反映されている。しかし、世界全体が全面的なグローバル化に入ったことを見据え、特に西側ポスト近代社会の構造的な特徴の衝撃を、中国社会は自ずと必然的に免れざるを得ない。その衝撃の及ぶところは、国土が広大で、地域的な差異が大きいなどの要素が作用したことから、中国社会（これを一つの全体として見なし）に前近代、近代、ポスト近代という三つの異なる心的態度を同時に顕現させることになった。発展の時系列的な軌跡が異なるのに伴い、このような分かれた心的態度は基本的に地域と一定の連帯感を有している。これは一つの社会実体として、中国全体が何ら互いに似通っていて、あるいはさらに互いに近い発展のテンポを提示し得ないことを意味している。ここにおいて、地域間の搾取は必然的に階級間の搾取を伴って、ともに姿を現してくる。それと同時に、社会全体がともに期待できる一つの最大公約数を求め得るかどうかも、ハッキリした問題になってくるであろう。

およそこのようにさまざまな形で明確に示されているのは、現代化の進展の中で、中国人が直面する問題は、少なくとも初期の転換、中期の安定、成熟期の変化といった3段階に分けて討論されなければならない。もちろん、自由主義は理性によって照らし出されるという主張あるいは左翼思想に見られる現実を修正しようとする主張は、基本的にはすべて初期の転換における問題、あるいはせいぜい中期の安定段階にあるに過ぎない。このため、（新）自由主義あるいは（新）左翼思想であろうと、それらは本質的には知識人が西側の啓蒙主義的な理性的な精神を延長してきたものであり、中国の特殊な国情に対応して現れた、中国が発展方向を確立するために出された段階的な理想に関する主張である。中国がさらに確定された発展のルートに立ち至るに伴い、一般庶民が日常生活の中で期待し、体験してきた平凡さのわずかばかりは、反対するパワーを備えたナロードニキの力となり、ある種の特殊な大衆文化を形成して、実際には社会の運行を導いている。言い換えれば、社会を動かしていく主要な力は最早啓蒙主義時代以来の特定の社会理論（あるいは歴史哲学）に伴われた人々の実際の行動ではなく、それとは反対の状況——大衆の慣性による実際の行動（多くの安っぽい期待とともに）が歴史を突き動かしてきた。あるいは、まさにこの時期に、中国の知識人はようやく真に彼らが長い間抱いてきた「まず天下の憂いを憂える」という歴史的な使命感を終結させ、歴史を引っ張っていく文化を解き明かす権限を取り出して、平凡な大衆に与えた。基本的にこのような発展趨勢はまさに民主体制が極地にまで発展した後のワンシーンであり、中国社会がこのような道を歩んでいけるかどうか、あるいはいかなる時期に歩んでいけるのかについては、さらに見つめていかなければならない。

（原文は中国語。邦訳 小島三多）